

病院が消える

～なぜ、医療崩壊の危機～

初めに、タイトルにびっくりされた方がいらっしゃると思われます。昨今の報道で医療機関の経営悪化が多数みられ、医療崩壊の危機に瀕しています。ここでその状況について概要をご紹介します。

(1) 日本の医療の現状

日本の医療は、世界有数の長寿国を実現し海外から高い評価を受けています。本邦では、全ての国民に平等に医療を受ける機会を保障するという観点から医療システムの体制整備が進められてきました。そして国民皆保険制度による医療ではフリーアクセス、平等給付の原則が守られ、患者さんは比較的少ない負担で高水準の医療を受けることができました。

しかしながら今の医療環境は医師や看護師などの医療従事者や病院にとって大変に苛酷なものです。これまで何とかやって来られたのは、医療従事者の医療に対する情熱と犠牲があったからです。入院したことがある患者さんは異口同音に「病院の先生がこんなに忙しいとは知らなかった」と言われます。そんなに忙しく長い時間働いているのに何故、病院は赤字になるのでしょうか？（日本臨床外科学会のホームページより）

(2) 病院経営の現状

全国で140病院を運営する国立病院機構では、2024年度決算で赤字病院は118病院で375億円の赤字を計上しています。この現状が継続すれば資金が6年で枯渇すると報道されています。

大学病院では、2024年度の全国81大学病院の経常損益は合計で508億円の赤字です。その内訳は国立大42病院が286億円、公立大8病院が91億円、私立大31病院が131億円の赤字経営で、高度医療の砦が崩落してしまう危機にあります。更に2025年度の国立大学42病院の損益は、400億円超の赤字と推計され、2024年度より100億円以上の悪化と発表しています。（全国保険医団体連合会のホームページより）

更に全国自治体病院協議会では、会員841病院を有しており、そのうち約9割の病院が赤字で、経常収支で3,600億円の赤字を計上しています。

赤字の主な要因は、収入である診療報酬が公定価格であるにもかかわらず、支出の増加であり、つまり人件費、物価高騰による医薬品や医療材料費の増加、光熱水費の増加などです。

(3) 当院の現状

当院の経営状況は先述の如く直近2年間は赤字収支になっています。その他に当院の大きな課題として、病院の老朽化、医師不足などがあります。病院の経営難は病院の老朽化による影響が著しく、患者さんはもとより、医師などの医療従事者の病院離れが顕著であります。

患者さんの病室なども老朽化により、衛生面やアメニティ面で満足の得られない現況であり、「選ばれる病院」としてはかなり低評価になっています。更に前橋近郊に在住する医師の桐生人気は極めて低く、特に若手医師の希望が非常に低迷しています。

(4) 新病院建設の必要性

当院の病棟は昭和63年建設で38年目を迎え、県内の主要病院では最も古く施設の老朽化により、毎年多額の補修・修繕費用を要する状況であります。

病院は医療提供の場として、24時間365日使い続けることで劣化が非常に早いため、政府の定める病院の法定耐用年数は39年とされています。

市民の命と健康を守るという観点から、施設の老朽化により患者さんに不測の事態が発生する前に、安心安全な医療を提供できる病院で、持続可能な診療体制を早急に確保していただきたいと考えております。

(5) まとめ

人口減少や少子高齢化による社会情勢の変化や、高齢化に伴う社会保障給付費の増加や、病院経営の危機などにより、地域の医療機関の減少（倒産、休廃業）が過去最多を更新しています。

病院医療は地域社会の重要なインフラのひとつでありますので、持続可能な医療提供体制の確保と安定した病院経営を実施できる病院を切に望んでいます。

【院長 加藤 広行】

